

編 集 後 記

2000 年 5 月 (62 巻 3 号) に「雪氷化学特集号」が出版されている。それから 11 年が過ぎた今春、約半年の南極での観測から帰ってきた私は、日本での生活リズムを取り戻すのに、少し苦労していた。そんな時に雪氷化学分科会の幹事長から電話があった。「おかえり。リハビリ向けのいい仕事があるよ。」と、まるでどこかで覗かれているかのようなようであったが、電話を切った時には、私は特集号の編集担当者の一人となっていた。

今回携わらせていただいた第 2 回の雪氷化学特集号は、昨年の雪氷化学分科会総会で投稿の呼びかけが行われ、7 編の原稿が寄せられている。その研究対象は、日本の積雪やアジアの氷河、南極の雪、室内実験などと広い。これは雪氷化学分科会に参加しているメンバーが雪氷学の様々な研究に関わり、活躍している結果であ

る。編集作業をしていると、私の取り扱ったことのない化学成分や生物などが取り上げられている原稿もある。作業中に「なるほど」と思う事もあり、大変ではあったが充実した時間であった。また、雪氷写真館で紹介している「雪合宿」は、雪氷化学分科会の恒例行事である。写真を通して、分科会の活動の様子やその雰囲気も分かっていただけるだろう。

どのような特集号になるかと思いがちの編集作業であったが、第 2 回の雪氷化学特集号は「雪氷化学分科会らしさ」が十分に含まれたものになったと思っている。無事に終わることができたのは、著者および査読者のおかげです。ありがとうございました。私にとっても、良い「リハビリ」になりました。

(雪氷化学特集号 編集担当 倉元隆之)